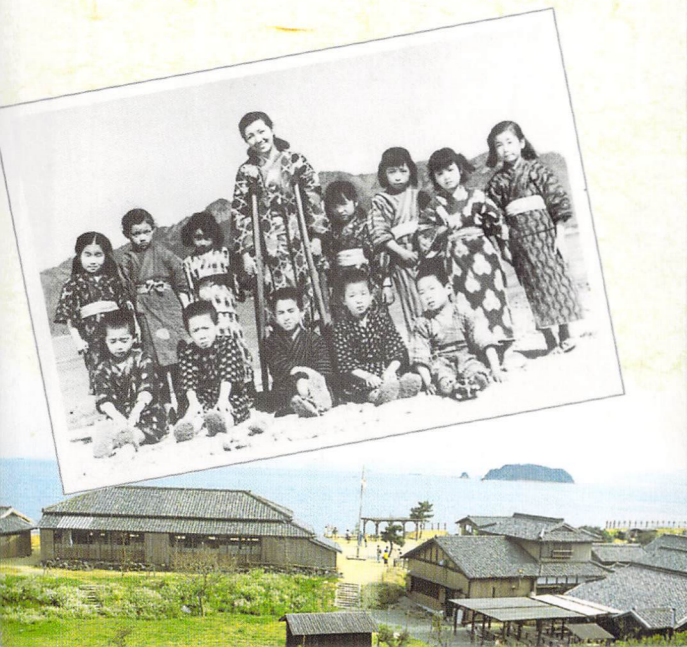


たずねて 二十四の瞳

昭和三年四月四日、
鹿山漁村の名が全日本、
あつはまるよこな、
瀬戸内海へりの一寒村へ、
若い女の先生が、
赴任して来た。

【壺井栄ノ小説「二十四の瞳」より】



二十四の瞳 映画村

岬の分教場よりさらに700m南、瀬戸内海を見渡す海岸沿い約1万平方mの敷地に、大正・昭和初期の小さな村が出現しました。これは再映画化された「二十四の瞳」のロケ用のオープンセットで、あの名場面の多くがここで撮影されました。1950年代日本映画黄金期のギャラリーや、アルマイト食器の給食セットが愉しめる「キネマの庵」や、昭和30年代の映画館を再現した「ギャラリー松竹座」など見所も多く、連日見学者で賑わっています。

目をつぶれば、そこに 二十四の瞳がかがやいています。

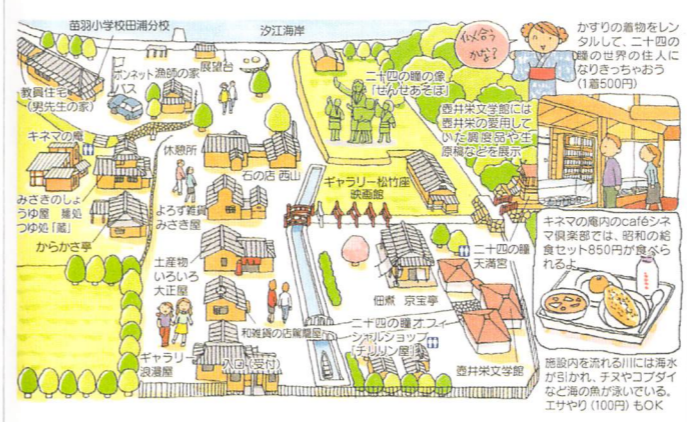


岬の分教場



明治35年(1902)8月、田浦尋常小学校として建築された瓦葺平屋建校舍1棟で、2教室と教員住宅を含んでいる。明治43年(1910)からは苗羽小学校田浦分校として使用され、昭和46年(1971)閉鎖。壺井栄の「二十四の瞳」の舞台となってから一躍有名となり、訪れる人が絶えない。町内に残る唯一の初期小学校でもあり、付近の集落とともに昔日のおもかげが残っている。

(昭和46年3月24日廃校)



二十四の瞳

一、汐風そよぐ、砂浜に
手と手をうなぐ、二十四の
瞳の色の、あどけなき
人の子ならば、どの子にも
しあわせあれと、祈る空

二、いたずらした子、無口な子
涙をためて、見上げた子
ひいふうみや、十八人
南に北に、別れても
胸の底に、浮かぶ顔

三、大人の道の、険しさを
こらえて生きて、思ひ出す
あの日の歌の、なつかしき
月日は過ぎて、かえらねど
岬に今日も、陽が沈む



写真左・高峰秀子 中・壺井栄 右・木下惠介▲

ものがたり

——舞台は瀬戸内海・小豆島。昭和3年の春、海辺の寒村からほど遠い岬の突端にある分教場に、大石先生は自転車に乗ってやってきた。1年生の12人はすぐに打ち解け、大石先生を大変慕った。ところがある日、先生は子どもたちがかけた落とし穴に落ち、足の骨を折ってしまう。それがきっかけで先生は分教場をやめ、本校に赴任することになった。そして4年後、分教場で教えた子どもたちは5年生になり、大石先生は結婚。その頃時局は上海事変にまで進んでおり、教師の中にも検束される者が出る。ショックを受けた大石先生も、やがて退職することに。戦争中に母と娘、そして夫を亡くし、2人の子どもをかかえて苦労する先生だが、終戦を迎え、13年ぶりに分教場の教壇に立つことになった。新しく持った生徒の母にかつての教え子があり、彼女は先生を同級生の墓に先生を案内し、古い他の仲間を集めて先生を慰めるために歓迎会を開いてくれる ——

壺井栄のおいたち

明治32年(1899)8月5日、香川県小豆郡坂手村(現小豆島町坂手)に醤油樽職人の父岩井藤吉・母アサの五女として生まれる。坂手尋常小学校、内海高等学校を卒業後、村の郵便局、役場に勤める傍ら文学に親しむ。大正14年(1925)上京し同郷の詩人・壺井繁治と結婚する。宮本百合子、佐多稲子の力添えて昭和13年(1938)「大根の葉」を「文藝」に発表。以来「暦」「母のない子と子のない母」「風」等、約300編にのぼる小説を発表し、新潮社文芸賞、芸術選奨文部大臣賞、女流文学者賞などを受賞。中でも昭和29年(1954)に木下惠介監督の手で映画化された「二十四の瞳」は一躍有名となり、今日の観光小豆島の盛況の端緒を開いた。昭和42年(1967)内海町(現小豆島町)名誉町民の称号を与えられた後、同年6月23日没した。享年67歳。

文学散歩道

壺井栄文学館

二十四の瞳映画村内には、壺井栄の代表作「二十四の瞳」の原稿、生前の愛用品、数々の初版本などを展示した壺井栄文学館がある。同館では併せて栄の夫である詩人壺井繁治、作家黒島伝治の書簡や色紙も展示しており、木製の応接セットなどは、繁治・栄夫婦の白鷺(東京)の家から、そのまま移したものである。この様に1つの町から同時代に3人の文学者が生まれるケースは全国でも稀である。



■岬の分教場
●開館時間 午前9時～午後5時
11月のみ 午前8時30分～午後5時
●入館料(大人(中学生以上))200円
小人(小学生)100円

■二十四の瞳映画村
香川県小豆郡小豆島町田浦 TEL 0879 (82) 2455
●開館時間 午前9時～午後5時
11月のみ 午前8時30分～午後5時
●入館料(大人(中学生以上))700円
小人(小学生)300円

■一般財団法人 岬の分教場保存会
香川県小豆郡小豆島町田浦 映画村内
TEL 0879 (82) 2455
http://www.24hitomi.or.jp



文学碑

坂手湾を見下ろす向かいの丘に、壺井栄の文学碑がある。その碑文には、生前好んで使った「桃栗三年柿八年柚の大馬鹿十八年」が刻まれている。壺井繁治の詩碑は、掘越の生家の上にある。「石は億萬年を黙って暮らしてつづけた その間空は晴れたり曇ったりした」この碑文は生前に本人が選んでいた作品である。苗羽芦浦には苗羽出身の小説家黒島伝治の文学碑があり、その碑には「一粒の砂の千分の一の大きさは世界の大きさである」と刻まれている。